
好きの距離

渡辺朝沙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

好きの距離

【Nコード】

N2468T

【作者名】

渡辺朝沙

【あらすじ】

近すぎてしまったからこそ交差する、幼馴染の男女の物語。短編です。

「え？秀ちゃんひでと？それは無いよ。

兄弟みたいなものだもん。

だから仲良いんだってば。

付き合うとか考えたこともないよ。」

友人のりっちゃんに笑いながら反論した。

たわい無い会話をしながら過ごす、いつもの休み時間だ。
りっちゃんとは波長が合う。

会話が途切れときに、慌てて次の会話を探すような
もどかしい時間も私達には存在しない。一緒に居てとても楽だ。

私にとって波長の合う人間がもう一人いる。

それが17年来の付き合いになる、幼馴染みの秀昭ひであきである。

私たちの母親は、互いに学生時代からの親友だ。

そのせいもあって、生まれたときから兄弟のように育てられてきた。

秀ちゃんとはともかく優しい。何でも許してくれる。

きつと誰に対してもそうなのだろうと思う。

私はそんな秀ちゃんに甘えるのがとても好きだ。

私がわがままを言ったときに見せる、

困ったように笑うあの顔がどうしようもなく好きだ。

「だってさ、秀昭くんモテるのに全然彼女作らないじゃない。

私にはあんただけ特別に見えるけどな。

雰囲気だって似ているし、お似合いだと思うけど。

よく一緒に帰ったり、休日遊びに行ったり、

やってること恋人と一緒にじゃない。

それが原因で彼氏とも別れたんでしよう。」

周りからはそんな風に見えていたのか。

つい3日前、付き合っていた彼氏に別れを告げられた私は、さほど落ち込んでいなかった。

秀ちゃんを悪く言われたことに腹が立ち、最後はお互いに言い合いとなって

喧嘩別れになってしまった。

家族同然だと何度説明しても、最後まで理解してもらえなかった。私なりに彼氏への気持ちと、秀ちゃんへのそれとは区別していたのだが、

周りからはそう見えなかったのかもしれない。

彼氏のことはきちんと好きであったし、デートにも行った。

キスもセックスもした。会話も楽しかった。

でも、それだけだった。

秀ちゃんやりっちゃんのような安心感は得られなかった。

秀ちゃんは私にとって家族のような存在で、一緒にいて本当に安心する。

しかし、恋い焦がれるような感情を抱いたことはないはずだ。

片思いに気持が高ぶり、

お互いに好きだと言いかうのが楽しくて、

付き合っている事実に満足を覚える。

それが彼氏でしょう？

秀ちゃんはその対象ではない。一時の感情だけの対象では決してない。

彼氏と秀ちゃんどちらの方が大切かと言われれば、

秀ちゃんの方が大切なのは事実だ。
しかし、それは家族だからであって
世間一般に言う好きとは少し違う。

それを上手くりっちゃんに伝えられる気がしなかった。

「りっちゃんだって弟と買い物行ったりするでしょう。それと同じだよ。」

秀ちゃんとは家が近いから一緒に帰ってるだけだし。
それに、秀ちゃんだって彼女いたことあったよ。」

私はいつも説明が下手だ。

「お前さ、彼氏のこともう平気なの。気分転換にどっか寄ってく？」

秀ちゃんは今日も優しい。いつも優しい。

哀しいくらいに優しい。

秀ちゃんが優しくなかったことなど無い。

優しいくない秀ちゃんは秀ちゃんではない、それくらいに。

彼氏に振られたのは私だ。

それなのにどうして私の為に

そんな悲しい顔をしてくれるのだろう。

「ねえ、秀ちゃん。」

「なに。」

「私のこと好き？」

「好きだよ。」

「私も好きだよ。」

秀ちゃんが居なくなったら、

きっと私が私じゃなくなるくらい好きだよ。

でもこれって家族だからだよ。そうでしょう?」

どうしてまたその顔をするのだろう。

困ったように笑う、どうしようもなく哀しくて、

どうしようもなく私が好きなその顔を。

「なに、急にどうしたの。今日何かあった?」

優しい顔だ。

その顔になんだかいつも哀しくなり、泣きたくなるのに。

「今日りっちゃんに、秀ちゃんと付き合えばって言われた。
彼氏と別れたのもあるし。」

でも、私にとって秀ちゃんはそういう対象じゃなくて、そんな彼女彼女みたいに簡単に終わってしまう関係じゃなくて、本当に家族みたいに大切なんだよ。世間一般の好きとは違うんだよ。」

本当に私は説明が下手だ。

いつも伝えたいことを上手く表現できない。

それでも、いつも秀ちゃんは全部わかったような顔をする。

秀ちゃんの顔を見ると泣きたくなる。

悲しいのか嬉しいのか、自分でもよくわからないけれど。

「お前にとって、俺って彼氏より上の存在なんだね。」

そう言って明るく笑った。秀ちゃんは嬉しそうに見えた。

私は何だかそれだけで嬉しくなった。

秀ちゃんは私に何かを追求したりしない。

だけど、私の質問にはきちんと答えてくれる。

曖昧ではなく、きちんと真面目に。

「秀ちゃんてさ、優しいよね。」

今度は優越感に満ちたような、

少し私を見下したような表情をしていた。

「ほんとに優しくないよ。お前だけ特別。」
その顔は何だか、本当に嬉しそうだった。

どうしようもないくらい好きな顔だと思った。

私は恋焦がれているのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2468t/>

好きの距離

2011年10月9日02時47分発行